

リレーコラム 13 キャリアの積み方 － 私の場合

何か一つからでも！

北野病院小児科 三上真充

医師 5 年目、小児科医 3 年目の夏に第一子を授かりました。“早く子育てするために、4 年制大学を出て、早く就職・結婚しちゃう方がいいかな...”と高校 3 年生の頃に、医学部進学と同程度の割合で考えていたくらい、子育ては将来の夢の一つだったので、今まさに夢が実現中です。妻は大学の同級生で、現在は他院の産婦人科医。当直を免除してもらうなど同僚の先生方に協力していただきながら、妊娠 35 週まで仕事をこなし、歓送迎会の帰り道に破水し 3 日後に出産。その 4 か月後には仕事に復帰しました。仕事復帰後も、息子との時間をもっと持ちたいという想いと、保育園のお迎えや急病時に他の先生方に仕事をお願いしなければならない心苦しさや、同期よりもどんどん仕事ができなくなる焦燥感とで、仕事を続けることに悩んでいることも多かったです。同じ悩みを持っている方も多いのではないのでしょうか。

対する私が“夢がかなってる♪”とはしゃいでばかりではいけないので、“たいしたことはできないけど、できることはやろう！！”をモットーに子育てを始めました。まずは初期のミルク。母乳哺乳時に感じる無力感とは対照的に、息子を独り占めでき、妻はその間しっかり休んでもらえるので、役に立っている実感があり、積極的に担当しました。次に保育所の通園担当。当院には院内保育園・病児保育があり、朝はだっこ紐で息子と二人で通勤・通園をしています。生後 1 歳を迎えるくらいまでは、息子もあやせばニコニコ笑い、楽しい朝のひとつときとなっていました...が、最近はずだんだん“なんで親父なんだよー”とややご不満な様子。お迎えは基本的には妻にお願いし、可能な限り離乳食を食べさせる時間・お風呂に入る時間には、一時的でも家に帰るようにして、一緒の時間が過ごせるようにしています。

もともと夜中ひっそりした時間に仕事をするタイプでしたが、最近は 21 時には寝かそうとすると、自分も一緒に眠ってしまうことも多く、ある意味健康的な生活サイクルにもなった気がします。つらつらと自分の今を書いてみました。全ての父親が、そして環境が私と同じ状況ではないし、私はすごく恵まれた環境で“イクメン”をさせてもらっていると思っています。ただ、“できることはやろう！”と思って、何かをするだけでも母親の負担を少し肩代わりできると思います。妻もそうですが、目標をもって医師になられた女性が、ぜひその目標も、そして子育てもあきらめずにできるような環境づくりができていくことを強く望んでいますし、これを読んで、“まー、じゃーなんかやってみよかなー”というお父さんが一人でも増えてくれれば幸いです。

みかみまさみつ
【著者略歴】 三上真充 1982年5月生まれ

2008年 大阪市立大学医学部卒業

2008～2010年 社会医療法人きつこう会多根総合病院(大阪)で初期研修

2010年～ 公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院小児科勤務

妻は大学の同級生で産婦人科医(他院)、1歳6か月の息子との3人暮らし

男女共同参画推進委員会より

「アロマザリング」という言葉があります。母親以外の個体が子どもの世話をを行うことです。ヒトの養育期間は他の動物に比べてとても長いので、母親以外の血縁や周囲の人たちが関わる必要があります。かつての大家族や近隣との密接な関係は今は消えてしまい、母親一人に育児が任され育児不安を抱えるようになりました。しかしこの育児不安の内容は育児や子供のこと以上に母親自身の現在の生活や将来についての不安や不満があります。現在の核家族社会のなかでの「みんなで子育て」の一番手は父親です。ところが男性の家事・育児時間についての国際比較を見ると女性を100とした場合北欧や米国の男性の参加度は60%以上に対して日本男性は30%にも満たず「父親にはなる」が「父親をする」ことがとても少ないことがわかりました。別の調査では父親の家事・育児時間が長いほど第二子誕生の傾向が強い結果が出ています。日本の少子化の理由がここからも理解できそうです。「なんかやってみようかなー」というお父さんが増えてくれることを願っています。

